

学生とともに地域に生きる － 調査実習と地域への成果還元 －

内藤直樹
徳島大学

「学生とともに地域に生きる」という標題は奇妙に思えるかもしれないが、地方大学という文脈における文化人類学的フィールドワークの可能性の一端を示している。演者の本務校に通う学生の約7割が地元出身者である。さらにその多くが地元の行政や企業に就職する。徳島県には農村部がひろがり、過疎・高齢化等の社会問題が顕著にみられる。こうした状況で実施されるフィールドワーク教育は、さまざまな事情からジモトノダイガクに通う学生が、自分がこれまで暮らしてきた場所を異なる目線で見直す機会を提供している。本発表の目的は、演者による文化人類学的なフィールドワーク教育の事例をもとに、複数の学問分野を背景にしたフィールドワーク教育実践が併存する状況で実践される文化人類学的なフィールドワークの意義や特徴について考察することにある。

演者が本務校に着任した直後の2011年11月、東日本大震災の教訓をもとに見直された地震・津波被害想定が発表された。その結果、大学が立地する徳島市を含む沿岸地域の多くで高い被災リスクが指摘されるに至った。それは演者や学生を含む多くの人びとの災害リスク認識を一夜にして転変させた。あまりの激変ゆえ、当初は行政による対処のうごきも鈍かった。ところがある沿岸部の過疎地域では、これまで防災の担い手としてはほとんど顧みられることのなかった高齢者が積極的な防災活動をおこなっていた。それゆえ演者は翌年度に実施したフィールドワーク実習のテーマを「沿岸部過疎地域における住民の災害リスク認識と対処」に設定した。これは演者にとっても学生にとっても〈自らの問題〉である防災のあり方について、他者の事例から再考する手がかりとなった。そのなかで、さまざまな状況で使用可能であることを旨とする一般的な避難道具の設計思想とは異なり、特定の地域だけで有効な避難道具を地域住民と開発した。

一般的にフィールドワークは、統制された環境で起こる現象を観察する実験とは異なり、統制されない環境で起こる現象の観察を基盤とする。フィールドワークは自然科学と人文・社会科学の両方で実施されているが、その目的や方法は学問分野によって異なる。このように現在は複数の〈フィールドワーク〉が併存している状況であり、文化人類学的なフィールドワークの特性や意義を「現場に行くこと」だけで説明することはできない。

そもそも文化人類学の目的は多様性を特徴とする人類の特徴（普遍性）を理解することであり、異文化理解（個別性）はその手段である。そして異文化理解は「異文化は学ぶ価値のある対等なものである」という文化相対主義的な立場をとることによって可能となる。また上述したように観察はあらゆる科学的発見の基盤をなす行為である。だが文化人類学的なフィールドワークの特性は、対象を客観的に観察することよりもむしろ、観察者の主観をも交えつつ浮かび上がるある種のリアリティを粗づかみにするという点にある。これらの点をふまえ演者は、フィールドワークの過程における教員・学生・地域住民による相互行為のなかで、それぞれが異なる価値のあり方を承認する態度や、主観と客観が混ざり合った認識を構成しながら新たな価値を創出しうることに、〈文化人類学的フィールドワーク〉のわずかな可能性を見いだしたい。